

多くの方が公民館を利用してくれています。ちょっとした話ですが、訪れた方々をつなぐ話題の一つにでもなればと思います。

そろそろ田植えが始まります。水路の不思議を調べてみました。

早朝から散歩を楽しむ人を見かけます。私はあまり考えずに散歩する派です。家を出ると勢いのある水音が聞こえてきました。浄水場の向かいの幅 80cm ほどの水路から聞こえてきます。途中から水路が消えて道路に変わりました。次に水路が現れたのは、野上中学校の北側です。くすのき公園からまた見えなくなり、次にバスが通る広い道路の脇に水路が現れました。

水路はつながっているのだろうか？変な疑問がわきました。つながっているなら、どんな風に調べられるのかなと思いました。くぐり抜ければいいのだけれど、それも無理かな。平安時代の貴族のように和歌を詠んで流してみたらとか、高校生がやるような「白線流し」とか思いつきましたが笑い話のようです。

簡単な方法が思い浮かびました。葉っぱを流したら。でも、流す人と葉っぱを見つける人が必要です。こんなことを小学生や中学生が「郷土学習」や「地域調べ」の時間でやってみると面白いのではないかと思います。

水路はどこまで続いているのかとか、逆にどこから流れてくるのだろうかという疑問が広がっていきます。また、水路が行き止まりになって、高い位置に水を上げるにはどうしたらいいのだろうかという疑問にぶち当たるかもしれません。現代ならポンプでくみ上げることもできますが、昔の人たちはどのように解決したのでしょうか。

『野上町誌』には「サイフォンの原理」を活用し「現在（昭和 60 年当時）もこの紀州流工法を実際に見ることができる」とあります。紀州流工法は、井沢弥惣兵衛が考案し、宝永 7 年（1710）、海南市の亀池の工事が完成します。その後、紀美野町の「佐々の涌」に着手したという俚謡（阪井亀池ご普請すんで、いこら野上の佐々の井へ）も残っています。

「佐々の涌」は唐戸瀬井堰と松瀬井堰の 2 説があって、和歌山の旅「わかやま歴史物語」では井沢弥惣兵衛が唐戸瀬井堰から 2.7km の水路を延長、中野上などの水田を潤したという記述もあります。

唐戸瀬井堰は下佐々から大成校舎の南側を回り、小畑の白岩橋、野上八幡神社南の看護学校付近へと続いています。また、松瀬井堰は、松瀬・大木・吉野・下佐々まで続いています。

どちらの散歩コースも片道 1 時間弱です。もうすぐ田植えです。

（令和 4 年 5 月 25 日）

